

シェイクスピアは何故引退したか：  
ジェイムス朝における宗教迫害と劇作家の信条

Why Did Shakespeare Retire?  
Jacobean Religious Coercion and the Creed of the  
Dramatist

東郷 公德  
TOGO Takanori

*The Tempest* is the last play Shakespeare wrote by himself without a collaborator. Many believe that in *The Tempest*, through the lines of Prospero, Shakespeare revealed his intention to retire from the stage and bid farewell to the audience. When he composed the play, he was still in his 40s. Why did he decide to retire so early, when he was still so popular? It may have been due to his secretly cherished Catholic faith and his desire to insinuate the Catholic cause into his works. When coercion by the Jacobean authorities became too severe and it became too dangerous for him to continue his covert practices, precariously eluding persecution, he had little choice but to retire. His decision to retire early was not made of his own will. He was forced to retire. To borrow the words of Clare Asquith, “Shakespeare did not retire— he was silenced.”

はじめに

ルネッサンス時代のイングランドを代表する劇作家ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) は、1564年4月23日にイングランド中部のストラットフォード・アポン・エイヴオン (Stratford-upon-Avon) に生まれ、1616年の誕生日に同じ故郷でこの世を去ったとされている<sup>1</sup>。亡く

## 2 東郷 公德

なった時に、ちょうど52歳になる（或いはなった）ところであった。彼は、その生涯に40弱の劇作品を書いたが、その内で彼が単独で書いた最後の作品は『テンペスト』(*The Tempest*)であった。執筆されたのは1610年から1611年にかけてであったと考えられている。この作品において、シェイクスピアは主人公プロスペロー (**Prospero**) の姿と台詞を借りて自らの引退宣言を行った、と一般に信じられている。劇の最後のエピローグで、プロスペローは次のように語る。

Now my charms are all o'erthrown,  
And what strength I have's mine own,  
Which is most faint. Now, 'tis true  
I must be here confined by you,  
Or sent to Naples. Let me not,  
Since I have my dukedom got  
And pardoned the deceiver, dwell  
In this bare island by your spell;  
But release me from my bands  
With the help of your good hands.  
Gentle breath of yours my sails  
Must fill, or else my project fails,  
Which was to please. Now I want  
Spirits to enforce, art to enchant;  
And my ending is despair,  
Unless I be relieved by prayer,  
Which pierces so that it assaults  
Mercy itself, and frees all faults.  
As you from crimes would pardoned be,  
Let your indulgence set me free. *Exit.*<sup>2</sup>

当時、シェイクスピアは、国王一座 (**King's Men**) というロンドン演劇界のトップの座にある劇団の俳優兼座付劇作家であり、また他の主な仲間と共に、劇団の共同経営者のひとりでもあった。彼が書く作品は次々とヒ

ットし、彼らが本拠地とする地球座 (The Globe) には、年齢、性別、身分の上下に関わりなく、多くの観客が詰め掛けた。また、国王お抱え劇団として王宮での催しにも度々シェイクスピアの劇団は呼ばれ、その都度、名誉と金銭的な褒美にあずかった。商業演劇における劇作家としての成功はシェイクスピアに経済的な繁栄ももたらし、彼は故郷にニュープレイス (New Place) という大邸宅まで手に入れていた。

ここで問題にしたいのは、このように劇作家、演劇人として成功の絶頂にあったシェイクスピアが、何故この時引退を決意し、『テンペスト』を書いたのか、という点である。年齢面では、この最後の作品を書いた時、シェイクスピアは46歳か47歳。若くはないが、その気があれば、まだまだ働けたはずだ。特に体調を崩していたということを窺わせる記録もない。早期引退の理由として様々なことが考えられる。劇作家として創作力の衰えを感じた、とか、十分稼いだので早めに引退したくなったのだ、とか。事実、晩年になって、幾分劇作のペースが落ちたかも知れない。しかし、それでもまだ、ほぼ一年に一本のペースは維持していた。経済的な理由については、シェイクスピア自身に聞いてみるのが出来ない今となっては、何の証拠もない。ロンドンで一人暮らしを長く続ける内に、悪い病氣（おそらく梅毒）に罹ったからだ、という説もあるが、これについても全く証拠はない。一体、この早すぎる引退の本当の理由は何だったのだろうか。

## 引退の理由（その1）

シェイクスピアの早すぎる引退の理由について、ピーター・ミルワード (Peter Milward, S.J.) 教授が、2005年に出版された最新の著作 *Shakespeare the Papist* (Naples, Florida: Sapientia Press) において、シェイクスピアがそのカトリック信仰に基づいて創作活動を行っていたという立場から、次のような説を提示している。

それによると、シェイクスピアが引退を決意したのは、ふたつの出来事によって彼のカトリック教徒とのつながりが明らかになり、これ以上劇作家としての活動を続けることが危険であると彼が判断したからであるという。その出来事のひとつは、1610年2月2日聖燭節 (Candlemas) のお祝いに、チョムリー・プレーヤーズ (the Cholmeley Players) という劇団に

より、ジョン・ヨーク卿 (Sir John York) というカトリックの国教忌避者 (a Catholic recusant) の邸宅 ガスウェイト・ホール (Gowthwaite Hall) で、シェイクスピアの作品がふたつ上演され、そのことが、星室庁裁判所 (the Star Chamber) で取り上げられ問題となった、という事件である。上演されたふたつの作品とは、『リア王』(King Lear) と『ペリクリーズ』(Pericles) であった。このふたつの作品は、比較的新しく (特に『ペリクリーズ』は恐らくまだ書かれて間もない新作であった)、また、ミルワード教授によれば、シェイクスピアの作品の内でも非常にカトリック的色彩の濃いものであった<sup>3</sup>。

もうひとつの出来事は、ジョン・スピード (John Speed) が、その著書 *History of Great Britain* (1611) の中で、シェイクスピアをイエズス会士 ロバート・パーソンズ (Robert Persons, or Parsons) と結びつけて、「このカトリック教徒とその詩人 (“this papist and his poet”)」と書き、非難したことである<sup>4</sup>。スピードは、シェイクスピアがロバート・セシル (Robert Cecil) の支援者であるコブハム卿 (Lord Cobham) の祖先をフォルスタッフ (Falstaff) という酔っ払い騎士の姿でコミカルに描き、それをロバート・パーソンズが、その著書でとりあげ揶揄したことを批判したのである。パーソンズは、同じくイエズス会士であるエドモンド・キャンピオン (Edmund Campion) と共にオックスフォード大学で学んだ後に1570年代に大陸に渡り、1580年に、イエズス会士として、密かにイングランドに戻り、国内各地を移動しながら、隠れて信仰を守り続けるカトリック教徒たちのためにミサを挙げるなどの宗教活動を行った。キャンピオンが捕らえられた後は、パーソンズは大陸に逃れて、さらに活動を続けていた。

当時のイングランドでは、カトリック司祭、特にイエズス会士は、敵国スペインおよびローマ教皇と通じたスパイとして、見つければ逮捕され、拷問を受け、処刑される運命にあった。処刑の方法も残忍で、例えば、絞首刑にした直後に、まだ息があるうちに引き降ろし、胸と腹を割いて内臓を取り出し、肢体を切り刻み、それらを大鍋で茹で、あるいは火で焼き、頭部は槍などの先に刺して晒し首にする、といったものだった。エリザベス女王 (Queen Elizabeth) を頂点に戴く新教徒たちにとって、これは、全く故のないことではなかった。キャンピオンたちがイングランドに上陸した1580年に、ローマ教皇グレゴリー13世 (Pope Gregory XIII) は、異端の

イングランド女王を殺しても重大な罪とはならない、という布告を出した。これは、イングランド国内のカトリック教徒たちに反乱を呼びかけるものであった。体制側がカトリック教徒を弾圧するようになるのも当然であったのだ<sup>5</sup>。

案の定、上陸後1年もたたない内にチャンピオンは捕らえられ、拷問を受け、残忍に処刑された。一方、パーソンズは、大陸に逃れ、海外からイングランド国内におけるイエズス会士たちの活動を指揮し、また著作を通して、カトリック教徒たちへの支援と宗教弾圧を続ける体制への批判を続けた。つまり、パーソンズは、当時のイングランドの支配者から見ると、第一級の危険人物であり、現代人に分かり易い言葉で言えば、国家転覆を図るテロリスト集団の指導者のように見られていたのである。スピードという人物の著作の中で、シェイクスピアはそのような危険人物と緊密な関係があるかのように書かれたのである。

こうしたふたつの事件が続いて起きたことで、シェイクスピアは、これまで隠してきた自分のカトリック教徒としての正体が明らかになり、これ以上演劇界での仕事を続けることは安全ではないと判断したのかも知れない。ミルワード教授は、これらの事件がきっかけとなり、シェイクスピアは引退を決意したのではないかと書いている<sup>6</sup>。

## シェイクスピアの信仰

さて、ミルワード教授がこの推測を行う際に前提となるのは、シェイクスピアがカトリック信仰を持ち、しかも、その信仰をただ隠し持っていただけでなく、創作活動の中で密かに表現し続けたということである。シェイクスピアの信仰については、過去においては多くの学者たちが彼には特に明確な宗教的信条はなかったという立場をとり、中にはシェイクスピアは無神論者であったとはっきりと明言する者も少なくなかった。しかし、1990年代後半から、次第にシェイクスピアはカトリック教徒であったと主張する研究書が多く出版されるようになった。2005年の現時点では、シェイクスピアが少なくともカトリック教徒として育てられたということについて、多くの研究者や伝記作家たちが肯定的な見解を発表するようになっている。さらに、ミルワード教授のような一部の研究者たちは、シェイク

スピアは死ぬまでカトリックの信仰を持ち続け、当局による厳しい検閲の目を逃れながらその信仰を創作活動の中で表現し続けたのだ、と主張するのである。

シェイクスピアが少なくとも青年期まではカトリック教徒であったということを示す主な論拠は、次の3つの点に分けてみる事が出来る。第1は、家族、すなわち、父、母、娘がカトリック信仰を持っていた可能性が極めて高いこと。第2は、シェイクスピアが学んだストラトフォード・アポン・エイヴォンのグラマースクールで教師をしていた人物たちが皆そろってオックスフォード出身のカトリック教徒であったらしいこと。第3点目は、学校を卒業した後でシェイクスピアがランカシャー (Lancashire) にあるカトリック郷士の屋敷で住み込みの家庭教師兼役者として働いていたらしい形跡があることである。

まず、第1の点、家族の信仰について見てみよう。劇作家ウィリアムの父ジョン (John) は、手袋と羊毛を扱う商人であり、一時はストラトフォード・アポン・エイヴォンの町長を勤めるほどの地元の有力者であったが、同時にカトリック教徒でもあったらしい。そう推測するひとつの根拠は、1592年に当局が作成したイングランド国内のカトリック国教忌避者についての報告書で、国教忌避者リストの中にジョン・シェイクスピアの名前があるのである。これについて、ジョン自身は、イングランド国教会の礼拝に参加しないのは借金について訴えられるのを恐れてのことだ、と弁明しているが、ミルワード教授によれば、これは当時多くのカトリック教徒が法律から逃れるために使った典型的な口実であった<sup>7</sup>。

シェイクスピアの父ジョンがカトリック教徒であったとする、もうひとつの、さらに重要な証拠は、ジョン・シェイクスピアの署名がある「信仰誓約書 (Spiritual Testament)」の存在である。これは、信仰の自由を奪われた新教国のカトリック教徒たちが、死に際してカトリックの儀式に与ることが出来なくともカトリックの信仰を守って死を迎え、その魂がカトリック教徒として無事に天国に上ることが出来るようにするために、ミラノ大司教カルロ・ボロメオ (Carlo Borromeo) が作成したものであった。この誓約書は、おそらくキャンピオンとパーソンズのふたりがイングランドに持ち込み、国内各地のカトリック教徒たちに配布したのだと思われる。ジョン・シェイクスピアの署名があるこの信仰誓約書が、18世紀半ばにシ

シェイクスピアの生家西側の棟の屋根瓦を張り替えていた職人によって、瓦と垂木の間から発見された。6枚からなる誓約書は、最初のページが紛失した状態で有名なシェイクスピア全集編集者エドマンド・マローン (Edmund Malone) の手に渡り公表された。しかし、その後、マローンは、筆跡や綴りに不審な点があるとして、この誓約書は偽物であると考えようになった。その後、20世紀に入ってからポロメオの書いた原典が発見され、また英語以外の言語に翻訳された版も発見されるに至って、この誓約書が本物であるという説の信憑性が高まった。チャンピオンとパーソンズは、イングランドに入る前にミラノでポロメオに会っており、ふたりは彼から直接誓約書の原典を受け取ったと思われる。このふたりのイングランド人イエズス会士は、それを英語に翻訳し、印刷してイングランド国内でカトリック教徒たちに密かに配布した。チャンピオンがイングランド中部のラップワース (Lapworth) というストラトフォード・アポン・エイヴォンから北に12マイルほど離れた場所に滞在した時に泊まったのは、ウィリアム・ケイツビー卿 (Sir William Catesby) という信仰心の厚いカトリック教徒の屋敷であったが、彼は、結婚を通してシェイクスピアの母メアリー (Mary) の実家であるアーデン家 (the Ardens) の親戚であった。ジョン・シェイクスピアは、このあたりの繋がりから信仰誓約書を手に入れたのかも知れない<sup>8</sup>。いずれにしても、この信仰誓約書が本物であるとするれば、ジョン・シェイクスピアがカトリック教徒であったことは、まず間違いないと言える。

シェイクスピアの母メアリーと長女スザンナ (Susanna) についても、彼女たちがカトリックの信仰を持っていた可能性が高いことを示す事実がある。まず、母メアリーの実家であるアーデン家は、1086年にウィリアム征服王 (William the Conqueror) が徴税のために作らせた土地調査簿であるドゥームズデー・ブック (the Domesday Book) にも4行 (four columns) に渡り財産が記載されているようなウォリックシャー (Warwickshire) でも有数の由緒ある名門でありカトリックの家柄であった。メアリーの父親ロバート・アーデン (Robert Arden) は、アーデン一族の主要なメンバーであった訳ではないが、それでもそれなりの財産を持つ地主であった。ジョン・シェイクスピアは、自分の父親が土地を借りていた人物の娘と結婚したのである。ウィリアム・シェイクスピアの母方の祖父ロバート・アー

デンは、まだカトリック女王であるメアリー I 世 (Mary I) の治世であった1556年に亡くなったが、自分の魂を、「全能の神と、我らの祝福された聖マリア」にゆだねると書かれた、非常にはっきりとカトリック的な遺書を残している。メアリーは8人娘の末っ子であったが、父親のお気に入りであったらしく、ロバートは、遺言により、メアリーに一番多くの土地と財産を与えた。この様な事情を考慮に入れると、シェイクスピアの母親であるメアリーがカトリックの信仰を持っていた可能性は極めて高いと思われる<sup>9</sup>。

シェイクスピアの娘スザンナについても、1606年の国教忌避者調査で「カトリックに影響を受けた人物 (a “person Popishly affected”) 」と記録されており、カトリックの国教忌避者であった可能性が高い<sup>10</sup>。

家族の次に、シェイクスピアが学んだと思われるストラトフォード・アポン・エイヴォンのグラマースクール、新国王学校 (King's New School) の教師たちについて見てみよう。シェイクスピアが知っていたと思われる教師たちは3人いるが、彼らはそろってオックスフォード大学 (Oxford University) で教育を受けたエリートで、おそらく全員がカトリック教徒であった。

まず、1571年から75年まで、シェイクスピアが7歳から11歳の時期に教師を務めたのはサイモン・ハント (Simon Hunt) であった。彼は、イングランド北部のランカシャー地方の出身であったが、そこはイングランドでも最もカトリック教徒の勢力が強い地域であった。1575年に教職を辞したハントは、フランスのドゥエ (Douai) の神学校に入り、1578年にはイエズス会士になった。また、大陸に渡る際に、彼は教え子のひとりロバート・デブデイル (Robert Debdale) を同伴した。シェイクスピアよりも7~8歳年上だったデブデイルも、やはりイエズス会士となり、イングランドに戻って、最後には処刑されることになる。

ハントの後任としてストラトフォードのグラマースクールに採用されたのはトーマス・ジェンキンス (Thomas Jenkins) で、彼は1575年から79年まで教師を務めた。彼は、オックスフォード大学のセント・ジョンズ・カレッジ (St. John's College) 出身で、カレッジの創設者でカトリック教徒のトーマス・ホワイト卿 (Sir Thomas White) の推薦状を携えて赴任して来た。当時、オックスフォード大学とケンブリッジ大学 (Cambridge

University) は、両大学とも表向きはプロテスタントの大学ということになっていた。しかし、実際にはまだカトリックを信じる者も多かった。ふたつの大学を比べると、特にオックスフォード大学の方がケンブリッジ大学よりもカトリック色が強かった。中でもセント・ジョンズ・カレッジは、表向きは国教会と女王陛下に忠誠を誓うカトリック教徒を進んで受け入れるという評判であった。ジェンキンスがセント・ジョンズ・カレッジで学んでいた頃に、エドモンド・キャンピオンも同じカレッジで学んでいた。彼らはお互いに知り合いだった可能性が高い。この様な状況から判断すると、ジェンキンス自身もカトリック教徒であった可能性が極めて高い。

ジェンキンスの後任は、やはりオックスフォード大学卒のジョン・コッタム (John Cottam) であり、サイモン・ハントと同様に彼もまたランカシャー出身だった。1579年から81年までストラトフォードで教師を務めたコッタムは、恐らくシェイクスピアが卒業した後に、彼の弟たちを教えたのではないかと思われる。このジョン・コッタムについては、彼自身よりもその弟のことが重要になる。

ジョンの弟トーマス・コッタム (Thomas Cottam) は、オックスフォード大学を卒業した後で大陸に渡り、カトリック司祭となった。トーマスは、その後1580年にキャンピオンたちと同じようにイングランドに戻って来た。しかし、大陸で知り合ったイングランド人カトリック教徒に身の上を話したところ、実はその男がイングランド当局のスパイであった。それで、事前に当局にはカトリック司祭トーマス・コッタムが入国するという情報が入っており、彼はドーヴァーに着くや否や逮捕されてしまう。しかし、彼の身柄を預かった人物が実は隠れカトリックで、トーマスを逃亡させてくれる。ところが、今度はこの恩人が投獄されそうになり、トーマス・コッタムは恩人を救うために自ら出頭する。彼は、ロンドン塔に1年間近く拘留されたあと、1581年11月に謀反人として法廷に召喚され、翌1582年5月30日に、ロンドンのタイバーンで、やはり残酷なやり方で処刑された。処刑される前に、彼もまたイエズス会士となっていた。

トーマスは、大陸を発つ際に、サイモン・ハントと共に大陸に渡った彼の教え子で、すでにカトリック司祭となっていたロバート・デブデイルから、家族へ宛てた手紙とコイン、金箔のついた十字架、ロザリオなどの土産の品を託されていた。これはストラトフォードの町にとって危険な状

況であった。カトリック教徒の若者を教師として雇っているだけならまだしも、反逆罪に問われて逮捕されたイエズス会士が、自分たちの町が運営する学校の教師の弟で、さらにそのイエズス会士が、兄の学校の卒業生であるイエズス会士の家族のもとに手紙と土産を届けに行く予定であったことが分かり、さらに恐らくは、途中で、町で教師をしている兄のもとにも立ち寄るつもりだったろう、というのである。兄ジョン・コッタムは、弟トーマスが召喚されたひと月後の1581年12月に、ストラトフォードでの教師職を辞し（あるいは辞めるように促されたのかも知れないが）、故郷のランカシャーに帰った。

この様に、シェイクスピアが子供時代に一日の大半を過ごした（学校は早朝夜明けと共に始まり、日没まで授業が続いたという）グラマースクールの教師たちは、そろってオックスフォード大学で学び、一流の教養を身に付けたエリートたちであったが、同時に、おそらく3人とも（そのうちのひとりサイモン・ハントは間違いなく強固な信仰を持っていた）カトリック教徒であった。もともとカトリックの家庭で育てられたウィリアム・シェイクスピアが、こうしたカトリックの教えを信じる若く優秀な教師たちと付き合うなかで、その信仰を確かなものとしていったと考えるのが無理のない見方であると言える<sup>11</sup>。

少年時代から青年期にかけてのシェイクスピアがカトリック教徒として成長したことを示す3つ目の根拠は、彼が、ストラトフォード・アポン・エイヴォンのグラマー・スクールを出た後で、ランカシャーにしばらくの間（おそらくは2年間）滞在し、まず、アレクサンダー・ホートン (Alexander Houghton) というカトリック教徒の大地主の屋敷で、さらにアレクサンダーの死後はその友人のトーマス・ヘスキス卿 (Sir Thomas Heskith) のもとで住み込みの家庭教師あるいは役者として働いていたという説にある。この説は1937年に初めて提示され、その後、1985年にE.A.J. ホニグマン (E.A.J. Honigmann) が、*Shakespeare: the 'lost years'* で取り上げ、再び注目を浴びようになり、現在ではかなり広く支持されるようになっていく。

その説の発端となった発見は、アレクサンダー・ホートンが死の直前の1581年8月3日に書いた遺書のなかに、後に劇作家となるストラトフォードのウィリアム・シェイクスピアではないかと思われる人物が出てくる

ということであった。遺書の中でホートンは、自分の持っている全ての楽器と役者用の衣装を弟トーマスに贈るが、もしもトーマスがそれらの品を保持し、さらに役者たちを雇い続けるつもりがないならば、それらを友人であるトーマス・ヘスキス卿に送るとしている。さらに続けて次のような一節がある。「そして、私はトーマス・ヘスキス卿に次のことを心からお願いたい。今私のもとで暮らしているファルク・ギローム (Fulk Gillome) とウィリアム・シェイクシャフト (William Shakeshafte) に親切にしてやり、彼らを雇い入れるか、あるいは新しい良い主人を見つけてやって戴きたいのである。」シェイクシャフトという名前はシェイクスピアの名前とは少し綴りが違うが、当時は、名前の綴りは極めていい加減で、おなじ人物の名前が何種類もの綴りで残されていることは良くあることで、シェイクシャフトとシェイクスピアの違いは、許容範囲内であると多くの研究者が考えている。

では、一体どうして1580年にまだ16歳だったシェイクスピアが、遠く離れたランカシャーで住み込みの仕事をするようになったのだろうか。実は、ストラトフォード・アポン・エイヴォンのグラマースクールに1579年に教師として赴任してきたジョン・コッタムの実家は、ランカシャーのホートンの屋敷があるところから10マイルほどのところにあった。そこで、このランカシャー説を支持する研究者たちは、シェイクスピアはジョン・コッタムの紹介でホートン家に仕えることになったのだろうと考える。当時、ホートンのようなカトリック教徒の大地主や貴族の屋敷には、多くの場合、カトリック司祭が召使などに身をやつしてかくまわれており、密かにミサを挙げたりしていた。一方、カトリック司祭をかくまったり、カトリックの儀式に使う品物などを保持することは、国家によって禁じられた重大な違法行為であった。従って、そのようなカトリックの屋敷で使用人を雇う際には、そうした秘密を決してばらす事はないと信用出来る、しかも表向きはプロテスタントとして通用する人物を選ぶ必要があった。おそらく、ホートンは、子供たちの教育のために住み込みの家庭教師を雇おうとし、優秀な若い人材、しかもカトリック教徒として信用出来る人物の紹介をコッタムに頼み、コッタムが紹介したのが、その時ちょうど教育を終える年齢に達していたウィリアム・シェイクスピアだったのだろう。シェイクスピアの父親ジョンの経済状態は、ウィリアムが13歳になったところか

ら急速に悪化し、ウィリアムは、たとえどんなに優秀であっても、オックスフォード大学やケンブリッジ大学に進学することは出来ない状況であった。ホートン家ででの仕事の口は、シェイクスピア家にとっても有難いものであったと思われる<sup>12</sup>。

このランカシャー説を多くの学者たちが支持することになった大きな理由がもうひとつある。それは、ホートンがその死後に「シェイクシャフト」の処遇を託したヘスキスの屋敷の近所には、有力なカトリック貴族で、しかも演劇に強い興味関心をもっていたストレンジ卿ヘンリー・スタンリー第4代ダービー伯爵 (Henry Stanely, Lord Strange, the fourth Earl of Derby) とその息子フェーディナンド (Ferdinando) が住んでいたのである。スタンリー家では、ストレンジ卿一座 (Lord Strange's Men) という劇団を抱えていたが、その中には、ウィル・ケンプ (Will Kemp)、トーマス・ポープ (Thomas Pope)、ジョン・ヘミングズ (John Heminges)、オーガスティン・フィリップス (Augustine Philips)、ジョージ・ブライアン (George Bryan) といった、後にシェイクスピアが活躍する宮内大臣一座 (the Lord, Chamberlain's Men) で主要な役割を果たす役者たちが含まれていた。シェイクスピアが彼らとの繋がりを最初に得たのは、このランカシャーで過ごした期間のことだったと考えられるのである<sup>13</sup>。

以上、ここまで見てきたように、シェイクスピアの家族、学校時代の教師たち、そして、最初についた職業などについて調べてみると、シェイクスピアはカトリック教徒として育ったことはほぼ間違いないと言える。次に、再び、本稿の主題である「シェイクスピアは何故引退したか」という問題に戻ることにしよう。

## 引退の理由 (その2)

先に紹介したピーター・ミルワード教授の最新の著作と殆ど同じ時期に、カトリックの立場からシェイクスピアの作品と生涯を考察した、極めて刺激的で重要な研究書が出版された。それは、クレア・アスキス (Claire Asquith) の *Shadowplay: The Hidden Beliefs and Coded Politics of William Shakespeare* (New York: Public Affairs, 2005) である。この著書の中で、アスキスは、ただ単にシェイクスピアがカトリック教徒であっ

たと主張するに留まらず、ミルワード教授と同じように、あるいは、さらに積極的な意味合いで、シェイクスピアがその生涯の創作活動を通じて、カトリック教徒の立場からプロテスタント国家による迫害に対して抗議を続け、また宗教的寛容と和解を求める呼びかけをし続けたと主張している。そのような抗議や呼びかけを公然と行うことはもちろん不可能であったので、シェイクスピアは様々な暗号 (code) や印 (marker) を使って劇作を続けた。そこに隠された意味は、エリザベス女王を含めた多くの同時代の観客たちには解読可能なものだったと言う。ここで、簡単に、アスキスが指摘するシェイクスピア作品に表れる主な暗号や印について紹介しよう。

アスキスが提示する暗号のシンボリズムは極めて単純である。例えば、「高い (high)」「美しい (fair)」といった語は常にカトリシズムを示し、「低い (low)」「黒い (dark)」といった語は常にプロテスタンティズムを表す。従って、『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*) では、背が低く色が黒いとされるハーミア (Hermia) はプロテスタントとして描かれており、一方で、背が高く美しいとされるヘレナ (Helena) はカトリックとして描かれている。同様に、『お気に召すまま』(*As You Like It*) では、背丈が低く色の黒いシーリア (Celia) がプロテスタントで、背丈が高く美しいロザリンド (Rosalind) はカトリックである。また、嵐 (“a storm or tempest”) は、常に宗教改革を表わす。アスキスによれば、少なくとも10のシェイクスピア劇に嵐が描かれるが、いずれの場合も、それらの嵐は宗教改革にともなう混乱や迫害を象徴しているという。また、月 (moon) が象徴するのはエリザベス女王である。これは月の女神ダイアナ (Diana) との結びつきから女王自身が認めた言葉の使い方であり、純潔な処女性を象徴するものであった。しかし、アスキスによれば、シェイクスピアをはじめとする反体制的なエリザベス朝の作家たちは、月の持つ否定的な側面を強調した。すなわち、月は暗闇を支配し、不毛・不妊 (barren) で、太陽の光を借りて輝いているに過ぎない。また、シェイクスピアは、月の変わりやすさ・気まぐれであるという属性 (inconstancy) を特に強調した。シェイクスピアの作品における月は非常に否定的な意味を持つものであり、その傾向は、エリザベス女王の死後にさらに強まった、とアスキスは書いている<sup>14</sup>。

この様な象徴を使った暗号により、シェイクスピアがその作品の中で、

いかにカトリック教徒の置かれた苦しい立場を訴え、それに対する救いを求めたか、アスキスはその著書の中で独自の解釈を存分に展開している。その内容は、とても刺激に満ち面白いのであるが、それを詳しく紹介することはまた別の機会に譲り、ここでは、そうした暗号を使って創作活動を行って来たシェイクスピアが、何故、『テンペスト』を書いた**1610**年から**1611**年頃にかけての時期に、まだ**40**代という年齢で早過ぎる引退を決意したのかという本稿での中心的な問題について、アスキスの考えを紹介したい。

**1603**年にエリザベス**1**世が亡くなり、スコットランドからジェイムズ**6**世がやって来てジェイムズ**1**世 (James I) として即位する。ジェイムズ新国王は、エリザベス女王の時代にイングランドで陰謀に加担したとして処刑されたカトリック教徒のスコットランド女王メアリー・スチュアート (Mary Stuart) の息子であったこともあり、イングランドのカトリック教徒たちは、はじめのうち、ある程度の宗教上の自由が得られるのではないかと期待した。しかし、その期待は直ぐに裏切られ、ジェイムズ国王の下でも、カトリック教徒は迫害され続けた。**1605**年には、火薬陰謀事件 (the Gunpowder Plot) が起こる。これはガイ・フォークス (Guy Fawkes) を首謀者とするカトリック教徒たちが、開院式当日の議会地下室に大量の爆薬を仕掛け、国王を含めた多くの人たちを爆死させようとした事件であった。陰謀は内部から密告者が出たことにより未然に発覚し、フォークスら首謀者をはじめ、彼らと関係のあったカトリック教徒たちが捕らえられ処刑された。イングランドでは、今でも事件のあった**11**月**5**日を「ガイ・フォークスの日」として、花火を打ち上げて陰謀が失敗したことを祝う習慣が残っている。この様な事件を起こしたことは、カトリック教徒にとっては自らの首を絞めるような結果となった。言うまでもなく、国家による弾圧はさらに過酷なものとなったのである。

こうした状況の中で、アスキスがシェイクスピア引退の大きなきっかけとなった出来事として挙げているのは、**1610**年のフランス国王アンリ**4**世 (Henri IV) の暗殺であった。アンリ**4**世は、もともとはプロテスタントであったが、生き延びるために、例えば、彼の婚礼の機会に起こされた新教徒虐殺事件であるサン・バルテルミの虐殺 (St Bartholomew's Day Massacre) に際しては、カトリックに改宗して難を逃れ、その後、再び新

教陣営に戻るが、フランス王位を継ぐと、また人心を集めるために再度カトリックに改宗し、内戦を終結し、1598年には、ナントの勅令 (**the Edict of Nantes**) を出して国内における新旧両派のあいだの宗教対立の緩和を図った。彼は、信仰に篤かったとはとても思えないが、極めて巧みな政治家であった。イングランド国内で、宗教的寛容を切望するカトリック教徒やピューリタンたちにとって、隣国フランスでそれを実行したアンリ4世は英雄的な存在であった。その彼を暗殺したのがカトリックの狂信的な修道僧だったことが、ジェイムズ国王のカトリックに対する態度を一層硬化させる原因となった。カトリック貴族たちに対しては、ローマ教皇に対してよりも国王に忠誠を誓うことを求めた1606年の「忠誠の誓い (**the Oath of Allegiance**)」が今まで以上に厳しく適用され、これを拒否した貴族たちは投獄され、多額の罰金を科され、屋敷を失うような結果となった。有力なカトリック貴族が没落し、あるいは身を守るために国王に迎合するようになる、それまで彼らの庇護のもとである程度の自由を許されていたシェイクスピアのようなカトリック派劇作家たちは、そうした強力な後ろ盾を失うこととなった<sup>15</sup>。

重要な後ろ盾を失った、という点においては、初代モンタギュー子爵 (**Anthony Browne, the First Viscount Montague**) の2番目の夫人であったマグダレン・モンタギュー (**Magdalen Montague**) が1608年に他界したことも大きな意味を持っていた。彼女は、若い時にメアリー1世に仕え、結婚後、エリザベス女王の時代になってからも、カトリック教徒としての信仰と生き方を貫いたことで知られている。彼女は、自分の屋敷に司祭をかくまい、ミサを挙げさせていた。何故それが可能だったのかについては、彼女の強烈な個性に対してエリザベス女王が敬意と愛情を感じていたからだ、とアスキスは書いている。彼女はシェイクスピアの最初のパトロンであったストレンジ卿ファーディナンド・スタンレーの親類であり、また、シェイクスピアのもう一人の重要なパトロンであったサウサンプトン伯爵ヘンリー・ライズリー (**Henry Wriothesley, Earl of Southampton**) は、彼女の孫であった。彼女の持つ多大な影響力が、シェイクスピアをはじめとする多くの劇作家たちをも守っていた。特にシェイクスピアにとっては、ふたりのパトロンによる庇護の背後には、常に彼女の力があったと言える。彼女の死後に書かれた『冬物語』 (*The Winter's Tale*) で、シェイクスピア

は、この偉大な恩人をポーリーナ (Paulina) として描いたのだとアスキスは考えている<sup>17</sup>。

さらに、イングランドの劇作家たちに直接の影響を与えたと思われるのは、カンタベリー大主教として、穏健派のランスロット・アンドリューズ (Lancelot Andrews) ではなく、熱狂的なカルヴァン主義者でカトリックの天敵として有名だったジョージ・アボット (George Abott) を国王が指名したことであった<sup>18</sup>。アスキスによれば、1610年以降、チャップマン (Chapman)、マーストン (Marston)、ダニエル (Daniel)、デッカー (Dekker)、ターナー (Tourneur)、ミドルトン (Middleton)、ドレイトン (Drayton)、ウェブスター (Webster)、フォード (Ford) といった主な劇作家たちが、ジョン・フレッチャー (John Fletcher) (アスキスによれば、フレッチャーは権力の手先だった) と屈従的に合作して政治的に正統な作品を書く以外に、殆ど目立った作品を書かなくなったという<sup>19</sup>。アスキスは、『テンペスト』の後で書かれたシェイクスピアのふたつの作品、『ふたりの貴公子』 (*The Two Noble Kinsmen*) と『ヘンリー8世』 (Henry VIII) は、共に殆どフレッチャーが書いたもので、特に『ヘンリー8世』については、シェイクスピアが書いたと見せかけて書かれたいわば贋作だとしている<sup>20</sup>。沈黙を強いられていた劇作家たちが再び作品を発表できるようになるのは1622年になってからだったが、これはアボット大主教が国王の寵愛を失い失脚した時期と一致する。最初のシェイクスピア全集である第1二つ折り本 (the First Folio) が1616年にシェイクスピアが他界してから7年後の1623年まで出版されなかった理由もここにあったのだ。

## おわりに

シェイクスピアが早くに引退を決意した背景に、彼のカトリック教徒としての信仰とそれに対する国家からの迫害があったのだというふたりの研究者ピーター・ミルワードとクレア・アスキスの考えをここでは紹介した。シェイクスピアがカトリックの信仰を生涯に渡って持ち続けたことを示す直接的な証拠はない。しかし、様々な事実を並べて見ると、シェイクスピアが確信的なカトリック教徒であった可能性は非常に高いと言える。彼が引退したのも、そうしたカトリックとしての生き方を彼が貫こうとし

たからであったのだ。

最初に引用した『テンペスト』のエピローグに戻ろう。

Now my charms are all o'erthrown,  
And what strength I have's mine own,  
Which is most faint. Now, 'tis true  
I must be here confined by you,  
Or sent to Naples. Let me not,  
Since I have my dukedom got  
And pardoned the deceiver, dwell  
In this bare island by your spell;  
But release me from my bands  
With the help of your good hands.  
Gentle breath of yours my sails  
Must fill, or else my project fails,  
Which was to please. Now I want  
Spirits to enforce, art to enchant;  
And my ending is despair,  
Unless I be relieved by prayer,  
Which pierces so that it assaults  
Mercy itself, and frees all faults.

As you from crimes would pardoned be,

Let your indulgence set me free. *Exit.*

これは、シェイクスピアがプロスペローの台詞を借りて書いた、観客への、仲間たちへの、そして彼を苦しめ続けた体制への惜別の言葉である。そこには、“prayer” “despair” “mercy” “pardon(ed)” “indulgence” といった、極めてカトリック色の強い言葉が並んでいる。プロスペローが今まで住んでいた孤島は、シェイクスピアにとっての劇場で、主人公がこれから帰ろうとしている故郷ナポリは、作者にとっては故郷ストラトフォード・アポン・エイヴオンである。ここで、“sent to Naples” となっていることにアスキスは注目している<sup>21</sup>。劇中でのプロスペローは自ら進んでナポリ

に帰ろうとしているのだ。ところが、ここで使われている単語は“sent”である。帰ることを「強いられている」というニュアンスがここにはある。さらに、「自分の目的」(“my project”)は「喜ばせること」(“to please”)とあるが、これは一体誰を「喜ばせる」ということなのだろうか。観客を喜ばせるためなら、この場に残って劇作を続けるのではないだろうか。それをあえて引退の道を選び劇作の筆を折るとするのは、検閲による締め付けを強める権力者たちを「喜ばせるため」なのではないだろうか。そして、これについてはアスキスは触れていないが、結びの部分で、「あなた方もご自分の罪 (“crime”) を許されるように」という箇所、「罪」を表わす単語として「宗教的な罪」を意味する“sin”ではなく、むしろ「世俗的な罪」を意味する“crime”を使っている点にも隠された意図があるのではないだろうか。シェイクスピアは、カトリック教徒を弾圧し迫害を続ける国王やその側近たちに対して呼びかけているのではないか。「あなた方も、カトリック教徒たちを迫害し、今回もこの私 (シェイクスピア) を引退に追い込んだということを含めた、自分たちが犯した様々な罪に想いを巡らし、神の許しを請いなさい」というのが、プロスペローの姿を借りたシェイクスピアが、ここで密かに伝えようとしていることではなかったのだろうか。

本稿で中心となる問い、「何故シェイクスピアは引退したのか」という疑問について、アスキスは、“**Shakespeare did not retire — he was silenced**”と書いている<sup>22</sup>。そう、シェイクスピアは、本当はまだ舞台を去りたくはなかったのだ。彼の引退は強いられたものだったのだ。

## 註

1. シェイクスピアの生まれた日については、はっきりとしたことは分からないのであるが、1564年4月26日に洗礼を受けた記録が残っていることや、亡くなった日が4月23日であり、またその日はイングランドの守護聖人聖ジョージ (St. George) の日でもあることから、通例4月23日が誕生日であるとされている。
2. この引用は次の全集による。

Proudfoot, Richard et al. eds. *The Arden Shakespeare Complete*

- Works*. Revised Edition. London: Thomson Learning, 2001.
3. Milward, *Shakespeare the Papist*, p.270, *The Catholicism of Shakespeare's Plays*, p.245, pp.269-70.
  4. Milward, *Papist*, p.270. *Catholicism*, pp.103-41. Asquith, p.263.
  5. Greenblatt, p.99.
  6. Milward, *Papist*, p.270.
  7. *Ibid.* p.8.
  8. *Ibid.* pp.8-10. Greenblatt, pp.101-2.
  9. Milward, *Papist*, p.14. Greenblatt, pp.58-9.
  10. Milward, *Papist*, p.xiv. Asquith, p.238.
  11. Milwar, *Papist*, pp.10-1. Greenblatt, pp.95-8.
  12. Milwar, *Papist*, pp.10-2. Greenblatt, p.89, pp.103-5.
  13. Greenblatt, pp.104-5.
  14. Asquith, pp.32-5, p.295.
  15. *Ibid.* pp.261-3.
  16. *Ibid.* p.37.
  17. *Ibid.* pp.39-42.
  18. *Ibid.* pp.262-3.
  19. *Ibid.* p.261.
  20. *Ibid.* pp.274-8.
  21. *Ibid.* p.272.
  22. *Ibid.* p.263.

#### 参考文献

- Ackloyd, Peter. *Shakespeare: The Biography*. New York: Nan A. Talese, 2005.
- Asquith, Clare. *Shadowplay: The Hidden Beliefs and Coded Politics of William Shakespeare*. New York: Public Affairs, 2005.
- Bate, Jonathan. *The Genius of Shakespeare*. London: Picador, 1997.
- Burgess, Anthony. *Shakespeare*. 1970. London: Vintage, 1996.
- Duncan-Jones, Katherine. *Ungentle Shakespeare: Scenes from His Life*.

- London: Thomson Learning, 2001.
- Greenblatt, Stephen. *Will in the World: How Shakespeare Became Shakespeare*. New York and London: W.W. Norton & Company, 2004.
- Honan, Park. *Shakespeare: A Life*. Oxford: Oxford University Press, 1998.
- Honigmann, E.A.J. *Shakespeare: the 'lost years'*. Manchester: Manchester University Press, 1985.
- Kermode, Frank. *The Age of Shakespeare*. New York: Random House, 2004.
- Milward, Peter, S.J. *Shakespeare's Religious Background*. Tokyo: Hokuseido, 1973.
- . *The Catholicism of Shakespeare's Plays*. Tokyo: The Renaissance Institute, 1997.
- . *Shakespeare: the Papist*. Naples, Florida: Sapientia Press of Ave Maria University, 2005.
- Richmond, Velma Bourgeois. *Shakespeare, Catholicism, and Romance*. New York and London: Continuum, 2000.
- Schoenbaum, Samuel. *William Shakespeare: a compact documentary life*. Oxford: Oxford University Press, 1977.
- Wilson, Ian. *Shakespeare: the Evidence, Unlocking the Mysteries of the Man and His Work*. 1993. New York: St. Martin's Griffin Edition, 1999.
- Wilson, Richard. *Secret Shakespeare: Studies in theatre, religion and resistance*. Manchester: Manchester University Press, 2004.
- Wood, Michael. *In Search of Shakespeare*. London: BBC, 2003.